

視点

『旭川支部をお引き受けして』

荒井建設株式会社 取締役社長

(2020年5月:北海道生産性本副会長・2006年7月旭川地区支部長就任)

荒井 保明 (あらい・やすあき)氏



略歴:1960年12月北海道旭川市生まれ。79年3月北海道旭川東高卒業。83年3月中央大学法学部法律学科卒業。86年6月荒井建設株取締役、87年5月常務取締役、2001年11月代表取締役社長に就任し、現在に至る。

【公職】旭川商工会議所副会頭、北海道経済連合会常任理事、(一社)旭川建設業協会副会長、(一社)北海道農業建設協会会長、(一社)日本建設業連合会北海道支部運営幹事

平成18年(2006年)満45歳の時に北海道生産性本部旭川支部長の役職を当時の旭川信用金庫理事長松田忠男氏(故人)から引き継いでもう15年になる。当時の生産性本部長をはじめ各地区支部長も退任されたり異動されたりということで全員が交替しており私一人が再任を続けている。長らく十勝地区支部長として運営にご貢献された植村副会長も前回の役員改選でご退任された。生産性本部の会合でも「植村節」を楽しく拝聴出来ないのは誠に寂しい限りである。

私が就任した際の本部長は、北海道電力の濱田副社長だったと記憶している。濱田会長は土木がご専門の方だったが、当社は明治27年(1894年)の創業以来ずっと全道で発電所の建設に関わる機会に恵まれていたため、とりわけ「水土木」には縁が深く、大変心強い思いであった。生産性本部は北電さんで新しい副社長が就任する度に新会長に交替したが、歴代会長には任期中に一度は旭川支部の総会・懇親会にご出席頂き、地域の話題や支部会員と熱心にご交流頂いた。毎回ひとかたならぬご指導・ご鞭撻を頂き大変感謝致している。

若いうちに支部長を引き継いだため就任当初は戸惑いもあったが、毎年本部理事会や総会を経験するうち他の経済団体では実施出来ない事業で組み立てようと支部の方針を固めた。いま支部の事業で毎年最も力を入れているのが機動的な施設見学会の開催である。上川管内や道内で話題や注目の施設があれば支部会員の皆さんとすぐに駆けつけ見学して自社や地元を持ち帰って頂いている。地域産業として有望な分野の発掘や将来的に産業の集積が見込める新技術の導入には、他地域で注目されている事業や施設を数多く体験し、我々自身が知識を深めて目を肥えさせる必要がある。

これまで訪問した施設としては、国立アイヌ博物館として昨年白老町ポロト湖畔に開業した民族共生象徴空間ウポポイ、将来避けて通れない放射性廃棄物の問題について基礎研究を行っている幌延町の深地層処分研

究施設、日本の宇宙開発の拠点となる可能性を秘めている大樹町のロケット発射施設、牛の糞尿からバイオガスと水素まで製造し発電・供給してエネルギー自給を実現している鹿追町のバイオガス発電施設などである。

また、北電さんのご協力では北海道で唯一の原子力施設である泊発電所、将来有望なクリーンエネルギーである水力発電所としてさらに出力を増強した新得町の新岩松発電所、小水力を活用する東川町の勇駒別発電所、また京極や石狩湾新港など新しい技術による発電所の建設工事にも訪問させて頂いた。どの施設でも担当者の皆さんに大変ご丁寧に対応頂きご協力に感謝している。

あいにくのコロナ禍により旭川でも地域経済が疲弊している。観光業や交通事業、飲食店などこれまで生産性本部において重点テーマで掲げてきた「サービス産業の生産性向上」に関わっている業界が全て大きなダメージを受けている。特に緊急事態宣言の特定措置地域指定などで札幌圏や首都圏、大阪圏、名古屋圏との往来が止まっていて国内観光客も動かず、酒類提供自粛など営業自粛により地元の人の動きも一層停滞している。まだ先を見通すことは出来ないが、ここ数年来支部活動の趣旨を理解してもらい入会に協力してくれた会員企業にも影響が及んでおり、今後も退会者が出る可能性がある。当社でもグループ会社で温泉旅館、外国人向けゲストハウス、日本料理店などを所有しており大きな影響を受けているが、助成金や支援金の給付を受けながらアフターコロナを見据えて今だから出来る活動として根本的な経営ビジョンの見直しやスタッフの教育訓練、施設のリニューアル等を実施している。また、7月13日と14日の両日は、旭川市内で当社グループの一員である日本料理店「花月会館」で、将棋の藤井聡太王位の防衛戦七番勝負第二局が行われる。この記事が連載される頃には対局が終わっているかもしれないが、暗い話題ばかりのなか数少ない明るい話題であり、対局が無事開催されることを心待ちにしている。